

恵庭市教育委員会 社会教育主事 藤野 真一郎（52才/A型/山羊座）

【恵庭市の紹介】

恵庭市は、令和元年の秋に人口7万人を突破し、人口減少が続く北海道の中では、数少ない人口増のまちです。また、道都札幌市まで快速で約24分、北の玄関口・新千歳空港まで約13分という恵まれた交通ネットワークを持つ道央圏の中核都市でありながら、豊かな自然にも囲まれる、充実した都市機能と自然が融合したまちです。



花苗の生産も盛んで、市民主導の「花のまちづくり」が進められてきました。社会教育の分野では、全国の自治体で先駆けてブックスタートに取り組み、平成25年には様々な読書の取組の集大成として「人とまちをはぐくむ読書条例」が制定され、「まちじゅう図書館」などユニークな取組もあります。

また市内には陸上自衛隊の3つの駐屯地があり、自衛隊のまちとして共存共栄で発展してきた歴史もあります。

【社会教育との出会いは学生時代】

教員養成の大学ではなかったのですが、何となく将来、先生になってバスケット部の顧問でもやりたいなあと教育学部に進み、いくつかあるゼミで、社会教育という言葉を知り、先輩に「社会教育って何するんですかあ!？」と聞いたら口をそろえて「ん〜うまく言えないけど、社会教育は何でもありだから」という言葉に惹かれて社会教育を専攻。今思えば、自分も聞かれたら同じように返すかも。。

【自治体職員の仕事は社会教育ではないか! ?】

卒論では、恵庭市の商店街組合の再開発を取り上げ、過去に三度ほどコンサルにお金を払い提案を受け、商店街の活性化に取り組むも頓挫し、地域が気付いたことは「他人に頼らず自分たちの力でやらないとダメなんだ」と背水の陣で取り組んだのが、講師を呼んだり視察したりと2年間の勉強会。その勉強会をコーディネート（学習支援）したのが、恵庭市経済部の職員。「その仕事って社会教育主事そのものでないのお!？」と感じ、



それがいつしか「恵庭市職員（自治体職員）として社会教育の感覚で地域づくりをやりたい!」という気持ちになり、そのまま恵庭市に奉職（平成8年）。最初の部署は花と緑の課で花のまちづくり4年。次に環境課で2年。いずれも花のまちづくりに取り組む市民の方々や団体、環境課でもNPOの方たちと仕事をしていて、「やっぱりこれって社会教育じゃん」と社会教育の何たるかを大して分からないくせに感覚的にそんなことを思いながら楽しく仕事をしていた。が、環境課3年目では、もっといろいろやりたいことを思い描いていたところで、まさかの社会教育課への異動…正直、落ち込みました。



【社会教育主事講習の受講にあたって】

当時、前任の社会教育主事がスポーツ課に異動し、自分はそこにハマった訳だが、実は学生時代に社会教育主事の資格を満たして卒業していない。それは「社会教育は面白いけど、社会教育行政で社会教育主事として●●講座だとか、事業をちまちまやるのは性に合わないな〜自治体職員としていろんな部署で地域づくりをやりたい自分には、かえって社教主事の資格は無い方がいい」と勝手に思い込み…今思えば浅はかだったが、いずれにしても改めて社会教育主事講習を受講することになった。

【住民の学習を支援する社会教育主事が、誰よりも学ぶことに貪欲でなくてどうする！！】

そんなことで、夏季期間に実施された社会教育主事講習の受講にあたり、「仏の合田さん」と呼ばれていた当時の係長に「僕はほとんど必要な科目は満たしているの、受講料も公費ですし、足りない科目だけ受講すればOKです」と言ったところ、仏の合田係長に「これから社会教育主事として住民の学習を支援する人間が、学ぶことに貪欲でなくてどうする！！」と初めて怒られ、その後いつもの柔和な笑顔で「職場のことは気にせず、思う存分学んで、ネットワークを作っておいで」と送り出されました。この言葉が私の社会教育主事としての原点です。30才の夏のことです。

【社会教育課(社会教育行政・社会教育主事)をふりかえって】

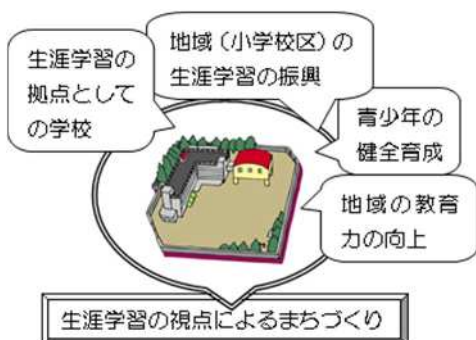
【エピソード1:「施策推進は事業をやらない」】

社会教育課に異動となり、社会教育主事講習を受講し、平成15年12月に社会教育主事の発令を受けた。社会教育課は、施策推進担当・振興担当・文化担当・公民館担当と担当が分かれていたが、私が担当となったのは施策推進担当。

仏の合田係長に「施策推進ってどんな仕事するんですか!?!」と



聞いて、返ってきた言葉が「施策推進担当は事業をやらない。事業を受け持つとどうしても事業に追われがちです。教育っていうのはね、5年先、10年先、時にはもっと先を見据えて「今、何をしなければならないか」という視点がとても大事です。社会教育も教育。だから施策推進担当に教育専門職の社会教育主事を配置しているんだよ」という言葉がすごく印象に残っている。でもそれは頭では何となく理解できて、体は何をしたらよいか全く分からず、合田さんに「とにかく興味を持ったところに足を運びなさい」とあちこち顔を出すことから始めたが、2年、3年と経つうちにこのような担当を作ってくれたことに大変感謝するとともに、教育（社会教育）に携わる者にとって、とても大切な事を学んだ気がした。



【コミュニティスクールの立ち上げの経験】

社会教育行政に異動となり、最初に取り組んだのがコミュニティスクールの立ち上げでした。今で言う学校運営協議会ではなく、当時、恵庭市独自の施策として「学校という教育施設は地域の生涯学習施設でもある」と捉え、地域住民が主体となって、生涯学習の視点でまちづくりを展開しようとするものです。

恵庭市のコミュニティスクールは、行政の施策ではあるが、地域住民の自主的主体的な運営によって、学校を拠点に様々なプログラム（生涯学習事業）を展開するものです。立ち上げるまで町内会や学校、地域活動関係者に説明・事前調整をし、設立総会を迎えたのは平成14年12月のこと。結果は…紛糾「いいことなのは分かるけど、それを地域住民にやれってことかい!?!」てな感じで、総論賛成・各論疑問符だらけ。若かりし私は、予想もしない展開でした。この日は町内会長さんにコミスク協議会の会長になってもらうところまで何とかこぎ着けて、どんなコミュニティスクールを目指すのかは、後日お願いするスタッフで話し合って改めて総会を開くことになりました。

そして、お願いして集まってもらったスタッフの方々。こちらで仕切ることもせず見守っていましたが、重苦しい空気でスタートしたのを覚えています。それもそのはず。紛糾した設立総会に加えて、同じ地域に住んでいると言ってもお互いに関係性があるとは限らない。そのうち会議室のあちこちで勝手な話をし出す。「来月の町内会の行事なんだけどさ…」「今度のPTAの役員会のことなんだけど…」そうこうして何回か会議を重ねているうちに狭い会議室の中だから、お互いの話している内容が聞こえてくる。



【設立当初のスタッフ会議の様子】

それなりに顔見知りになり会話もできる関係になってくると「あら、町内会でそんなことを取り組んでいるんですね」「今のPTAはそんなことで悩んでいるんだ」など、スタッフ会議が地域のラウンドテーブルと化してきた。その延長上に「もっと地域の人々が学校を身近に感じて足を運んでほしいよね」という話になり、そこから「つどう・まなぶ・ふれあう」というコミスクのキャッチフレーズが生まれた。

【「町内会育成部長の発言…社会教育を意識した瞬間」】

そんなことでイイ感じになってきたスタッフの皆さん。平成14年の冬(12月)に波乱のスタートをしたコミュニティスクールは、平成15年秋(9月)のオープニングセレモニーに向けて話し合いを重ねていく中で、ある町内会のご高齢の育成部長さんが「もうすぐ夏休みになります、育成部で子ども達を集めてラジオ体操をしています。でも育成部の大人が少なく大変です。せっかくコミュニティスクールが出来ていろんな方がスタッフになってくれるから、ラジオ体操を手伝ってもらえますか」とスタッフ会議で投げ掛けました。その時の様子を鮮明に覚えています。総じて「今、コミスクをこれからどうしていくかという話をしているのに、なんで関係のないラジオ体操の話をしているんだ」という冷やかな空気が流れ、私自身も居たたまれない気持ちになりました。平成15年7月のことです。

そして、無事秋にオープニング事業を終え、お互いアイデアを出し合い、毎月いろんなプログラムを展開し、ようやく軌道に乗ったコミュニティスクール。そして1年が経過し、もうすぐ夏休みを迎える直前のスタッフ会議で、あの育成部長さんが再び口を開きました。

「もうすぐ夏休みになります、育成部で子ども達を集めてラジオ体操をしています。でも育成部の大人が少なく大変です。せっかくコミュニティスクールが出来て、いろんな方がスタッフになってくれるから、ラジオ体操を手伝ってもらえますか」とスタッフ会議で投げ掛けました。それを聞いた瞬間、私は正直「あちゃー」と思いました。あの居たたまれない空気を思い出したか



夏休みのラジオ体操



ラジオ体操後のペタンクで交流

らです。そうしたら次の会話が「それは大変だね、コミスクの事業ではないけど、有志で出られる人だけでもラジオ体操を手伝おう」と口々に呼応したのです。一年前の会話を覚えている方は誰もいなかったかのように…そして夏休みが終わったスタッフ会議でラジオ体操を手伝ったスタッフが「子ども達は、ラジオ体操が終わった後も、すぐに帰らずにしばらくグラウンドで遊んでいるんだね。なんか見ていてもったいなあと思いました」

【ラジオ体操後のペタンクによる交流】 という発言から、翌年のラジオ体操では終わった後にペタンクというレクリエーションスポーツを有志のスタッフで指導してゲームをするようになりました。その翌年には夏休み後にコミスクのプログラムとしてペタンク大会を実施するまで発展しました。

その時に感じたことは最初の育成部長さんの発言に対するスタッフの反応と1年後のスタッフの反応の違いは「何が、どう、作用してそんな変化になったのだろう!？」この意識の変容を考えているうちに「ここに社会教育主事として大事なことがあるのではないか!？」と思うきっかけとなった社会教育主事駆け出しの頃の出来事でした。

【コミュニティスクールからコミュニティ・スクール（学校運営協議会へ）

このコミュニティスクール事業の経験は、恵庭市恵み野小学校を舞台に取り組んできましたが、令和3年度からは、恵み野小学校コミュニティ・スクール（学校運営協議会）がスタートし、その中の部会の一つ（ふるさとふれあい部会）として引き継がれることになりました。

社会教育主事時代に取り組んだことは、どれもこれも楽しかった。学んだことも沢山あった。飽きっぽい性格の自分が13年間、毎年新鮮で、内心「退職まで社会教育で仕事出来たらいいのになあ〜」と思いながら過ごした。

ただ、たまにつらいと言うか、いつもプレッシャーが掛かるのは、（教育）行政として地域住民に手掛けてもらって形にしてもらう施策や事業がどうしてもある。市の施策や国・道教委から降りてきたものなど…自分自身は「これは地域にとってもプラスになる」と確信を持って（そう伝えられると判断して）アプローチするのだが、やはり最初からスムーズに行くことは中々ない。試行錯誤・紆余曲折を経ながらも「最初は気が進まなかったけど、藤野君の頼みだし、仕方ないなあと思っていたけど、やってよかったわ!」とか「やっぱりこういう取り組みは地域に必要なよね」という声が聞けて、初めて安堵するという経験がある。

「与えられた課題」から「自分（地域）の課題」として、「客体」から「主体」へ意識の変容を図ることの難しさと同時に一度動き出した地域のムーブメントのダイナミックさに魅力と感動を何度も覚えた。

もちろんその「課題設定」と、「仕掛け」や「手法」が的外れであれば論外ということにもなるが…この「与えられた課題（取り組んでほしい課題、しかしそれらの多くは潜在的な必要課題だったりする）」から「自分（地域）の事として向き合うべき課題」へと意識の変容を図る経験は、異動先で新たなミッションに対して、地域の方と一緒に取り組むときに、その経験がとても生きることとなった。

また、先ほど「学んだことも沢山あった」と書いたが、これが一言では言い尽くせないが、一つ間違いなく言えることは、社会教育主事として育ててもらったのは地域の方々ということである。主事講習を終え、社会教育主事発令を受けたが、そこから（親が子を授かった時に、そこから親になっていくように）地域の方々に育てられて「社会教育主事になっていく」という感覚があった。ありがたいことである。

【こぼれ出た地域活動を拾う→意図的に生み出す】

事業には目的があり、それが達成出来たかどうか…

これまで様々な事業を実施してきたが、正直、事業をこなした感じもなくはない…事業をきっかけに地域活動に何かしら広がりをも思っていたのだが、今日種を蒔いて、明日芽が出るというものでもない。単発事業の評価とは別の評価軸が必要だと考える。

先述のコミュニティスクールで言えば、学校を拠点に地域住民主体による生涯学習事業がうまく回るようになれば、事業としては成功かもしれない。だが、コミスクスタッフが、育成部のラジオ体操を支援し、ペタンク交流会が生まれたエピソードの他にも町内会の盆踊りにPTAが焼き鳥の店を出すようになる、或いは学校敷地内に地域農園を作り、児童の食育授業として活用してもらうなど、コミスクで出来たつながりからコミュニティスクールの事業計画にはない取り組みが生まれてきた（こぼれ出た）。

それを垣間見たときに「この動きを地域の方が偶発的ではなく、意図的に展開できるようになれば本物になるのではないか」と感じ、同時にそこに心を砕くのが社会教育主事の役割ではないか、と考えるようになった。

そうすると、事業の見方も地域との関わり方（会話）も変わった。（地域主体の）事業は「上手に出来たかどうか」は正直（社会教育主事としては）気にならなくなり、地域の方がどんなことを感じ、今、何を考えているのか!?いつもそのことが気になり、そこから次の展開のヒントを探すようになった。



↑コミュニティスクールからこぼれた活動↑

【社会教育主事の専門性って何だろう】

「社会教育主事」の専門性って、何だろう! ?と（特に社教主事時代は）いつも頭にチラついてた…

→地域に溶け込むのが上手な職員は他にもいるし、ファシリテーターが得意な職員もいるし…

「社会教育主事」の専門性を言語化することは本当に難しいと感じている。

→でも、間違いなく教育専門職としての専門性はあり、それは手法論的なものだけではなく、教育的な視点（親が我が子に関わり(家庭教育)、教師が児童・生徒に関わり(学校教育)、大人になっていくように、地域がより主体的に地域課題を解決しながら成熟した市民社会になっていくという視点）を持ち合わせて、地域を捉え、地域の中でのお互いの関係性（つながり）を築き、**その関係性**（例えば、先述のコミスクのラジオ体操支援のエピソードのような意識変容は、スタッフ同士が影響を及ぼし合う関係性の構築）によって、**お互いに高め合う（意識の変容が起きる）地域を目指して、意図的に関わる、その関わり方に専門性があるのかなあ**と何となくですが、今はそんな感じで思っています。

→でも、それって社会教育主事（社会教育行政）だけの話ではないよな→**社会教育士の出番かあ!?**